

ように記してあります。

### 『藤トコロ』

倭名鈔〔和名類聚抄〕に。崔禹錫食經の藤。兼名苑注の黄藤。并に読でトコロといひ。俗に用芘字。漢語抄に用野老字。今按〔あんずる〕に所出並未詳と注せり。トコロといふ義不詳。我国之俗其名によりて芘の字を創造〔はじめつく〕りて。読でトコロといふ。宅読でヤドコロといふが故也。其根鬚〔ひげ〕多くして。老人の黄鬚なるを見るが如くなれば。野老の字を用ゆる事。猶海蝦〔えび〕の長鬚なるをもて。海老の字を用ひて。読でエビといふが如くなる也。…』

注(1) わみょうるいじゅしょう。p.118の注(1)参照。

注(2) 新井白石著。享保2年〔1717〕から撰述を始め同4年2月完成。「和名類聚抄」の物名の語源を考証したもの。全20巻48部。

注(3) 江戸中期の儒学者・政治家。名は君美〔きんみ〕、字は済美。木下順庵門人。徳川家宣の時、幕府儒官。幕政に参与し、前代の弊政を改革した。朝鮮信使の抑制、幣制の整備、閑院宮家創立などが主な業績であった。筑後守の官名を受けた。公務に関する備忘録「新井白石日記」や「藩翰譜」「読史余論」「采覧異言」「西洋紀聞」「古史通」「東雅」「折たく柴の記」などの著がある。享保10年〔1757〕5月9日歿、59歳。

資料 大漢和辞典（諸橋轍次）

## 79. 支倉使節の往路について

問 「宮城県社会科学学習事典」（宮城県郷土学習研究会編）の「支倉常長」の項に『太平洋を九〇日間航海してメキシコのアカプルコに着くと、そこからはスペインの軍艦で大西洋を回り、スペインのマドリッドで国王フィリップ三世と会った。』とあるが、アカプルコからスペイン軍艦に乗り換えたのでしょうか。

答 問題の個所の表現には、極端な途中省略があるようです。アカプルコは、メキシコの太平洋岸の海港です。此処から大西洋に回る航海など、当時はなおのこと不可能な難事であります。常長の一行は、アカプルコで上陸し、メキシコを陸路横断、メキシコ市を經由して大西洋岸に出、サン・フワン・デ・ウルア港に到着、この港でスペイン軍艦に乗り込んだのでした。「支倉常長伝」（支倉常長顕彰会編）に、

『慶長18年〔1613〕9月15日、いわゆる遣欧使節がサン・フワン・パウティスタ号に乗って、ヨーロッパに向け出帆……さて一行の乗った船は太平洋を横断し、一六一四年一月二十五日ノビスパニア

のアカプルコに到着した。使節一行は陸路メキシコ市に向かい、三月の終りごろ首都メキシコ市に安着したが、アカプルコ上陸以来一行はいたる所で大歓迎を受けた。支倉はノビスパニア副王グワダルカサル侯(ディエゴ・フェルナンデス・デ・コルドバ)<sup>(3)</sup>に、政宗の親書を手交し、またメキシコ市滞在中、日本人随員のうち七十八名が洗礼を受けた。五月八日支倉は、ヨーロッパへ赴く一行の人数を三十名ほどの小グループにしぼり、大半の日本人の随行員を残して、メキシコ市をあとにした。一行はプエブラ・デ・ロス・アンヘレス・ベラ・クルスを経て、サン・フワン・デ・ウルア港に到着、ここでアントニオ・デ・オケンド司令官の率いる艦隊に乗り組み、六月十日同港を出帆、七月二十三日ハバナ港に到着した。一行はハバナでロベ・デル・メンダリス司令官の率いる別の艦隊の来航を待ち、その到着とともに、サン・フワン・デ・ウルアから一行の乗ってきた船は、この艦隊に合流した。かくして一行は八月七日ハバナ港を出帆、その後大西洋横断中いくたびか暴風雨にあい、危険に瀕したこともあったが、十月五日無事スペインのサン・ルカ港に到着した。はるばる故国を後にした一行は、すでに一年の月日を費し、いまとにかくもヨーロッパ大陸に第一歩を印したのである。』とあります。「ローマへの遠い旅―慶長使命支倉常長の足跡―」(高橋由貴彦)・「慶長使節」(松田毅一)などの資料は勿論のこと、少年向けの「ローマにかけるゆめ―支倉常長―」(浜田けい子)など、すべて、上記の通りの往路をとっています。問題の図書は、小中学校社会科の参考用に編集されたものですので、誤解を伝えないために訂正されなければなりません。

なお「伊達政宗南蛮通信事略」(大槻文彦。明治34年刊)に次の記事があります。

『支倉等一行ノ船ハ……明年一月、濃毘数般<sup>(4)</sup>〔ノビスパン〕ノ「アカプルコ」港ニ着シ、遂ニ墨斯哥〔メキシコ〕府ニ入テ、……更ニ太平洋<sup>(3)</sup>ヲ渡リテ、十月、西班牙〔スペイン〕ノ「サン・リュカル」港ニ着シ、……』

この書は「伊達政宗南蛮遣使考全集」(伊勢斎助編。昭和3年刊)にも、字句を改変することなく収録されて『……更ニ太平洋<sup>(3)</sup>ヲ渡リテ、……』と印刷されております。しかし、これはこの書の英文編の当該箇所を参照しますと、『The embassy crossed the Atlantic, arrived in October at San Lucar Barrameda, Spain.』とあり、太平洋とあるのは、大西洋のミスプリントであることが明らかであります。

注(1) p.217の注(1)参照。なお、同注の中に『慶長18年48<sup>x</sup>才の時南蛮遣使の正使を命ぜられ…』は『43才の時』のミスプリントなので、ここに訂正して置く。

南蛮遣使のことについては、p.215の「89. 伊達政宗の遣欧使節の船名・船型」、p.226の「89. 遣欧使節の「松右衛門帆」はどのようなものか」、p.420の「149. 征蛮詩の作者は誰か」をも参照。

注(2) メキシコ南部太平洋岸、ゲレロ州の港市。メキシコ・シティ南南西196kmに位置し、人口24万(1978年推定)。天然の良港で、北米太平洋岸で最も古い港の一つで1550年に開かれた。スペインの植民航海中はフィリピンへの出発地であった。サンフランシスコとパ

ナマを結ぶ汽船の寄港地で、最近ではメキシコ第1の保養地として急激に発展した。慶長19年〔1614〕支倉常長一行が上陸したところで、アカプルコの海岸のうちで最も古く開かれたオルノス・ピーチに支倉立像と、スペイン語の碑石が建てられている。支倉像は、昭和47年11月常長生誕4百年記念に仙台市川内に建てられた支倉六右衛門像と同鑄である。昭和48年、仙台市と姉妹都市の提携をした。

注(3) ノバ・イスパニア Nueva Espana。スペイン(イスパニア)植民地時代のメキシコの呼称、「新イスパニア」の意。日本では徳川時代、ノビスパン(濃毘数般)と呼んだ。

注(4) p.110の注(4)参照。

資料 支倉常長(支倉常長顕彰会編)

ローマへの遠い旅―慶長使節支倉常長の足跡―(高橋由貴彦)

慶長使節(松田毅一)

ローマにかけるゆめ―支倉常長(浜田けい子)

支倉常長伝記(鈴木省三。「伊達政宗欧南遣使考全集」の内)

## 80. 式内社「遠流志別石神社」のこと

問 石越町北郷字中沢の「遠流志別石〔おるしわけいし〕神社が、式内社<sup>(2)</sup>で由緒も古く、石越の地名もこれに由来するとされていますが、「宮城県史」16の栗原郡築館町内旧富野村の項にも「遠流志別石神社」が式内社として記されています。同名の式内社が2社あったのでしょうか。

答 式内社とは、「延喜式」の神名帳<sup>(3)</sup>に記載されている神社を指します。「延喜式」巻10の神名帳の中に、次のように記されています。

『栗原郡七座<sup>大一座</sup><sub>小六座</sub>

表刀〔うわたの〕神社	志波姫神社 <sup>名神</sup> <sub>大</sub>
雄鋭〔おとの〕神社	駒形根神社
和我〔わかひの〕神社	香取御児神〔かとりみこかみ〕社
遠流志別石〔おるしわけいしの〕神社	』ですから、

式内社としての遠流志別石神社は、元来唯一社だけであります。

「延喜式」とは、律令の施行細則<sup>(4)</sup>ですので、律令制の衰退とともに実効力を失い、式内社についても、全国的に所在不明となってしまったものも多く、今日まで祭祀が一貫して存続しているものとは限らなくなりました。しかも、神名帳は上記したように、もともと国郡単位で、所在の村字名等